

社 長 相 互 の 交 流 誌

NENRIN

年 輪

2024.11.10

Vol.197

TOP INTERVIEW

株式会社 シマブンコーポレーション

企業紹介

株式会社 片山化学工業研究所

特集

今を見据え、次代に活かす

女性の活躍推進で
企業の活力向上へ

企業紹介

株式会社 片山化学工業研究所

株式会社片山化学工業研究所は、生命の源であり、人々の生活や産業に不可欠な“水”をテーマとした多様な事業を展開している。研究開発を重視する企業姿勢から生み出される水処理製品や環境分析サービスは、これまで60年以上にわたって製紙や鉄鋼、石油化学、エネルギー関連、さらに水産業など、様々な産業の発展を支えてきた。野村安宏社長に事業の特徴や今後さらに進む環境社会、デジタル社会にも対応した事業展開についてお話を伺った。

“水”に関わる処理技術で産業や暮らしを支え、環境問題の解決にも挑む

Products & Service

業界トップクラスの 水処理技術が強みに 産業の発展に貢献する

私たちの日々の暮らしをはじめ、農業、産業などを支えているものの1つが“水”である。全ての産業は、冷却や発電ボイラ、洗浄などの様々な工程で「水」を利用しています。貴重な資源である水をリユーズ・リサイクルできるようにしたり、製造に悪影響を与えるスケールや腐食低減する薬剤開発をはじめ、ソリューションを提供する水処理のリーディングカンパニーとして知られるのが、株式会社片山化学工業研究所（以下、片山化学工業研究

所）だ。「当社では、長年にわたる化学薬品・技術の研究開発ノウハウを強みとして、工業用水処理剤やボイラープラント水処理剤をはじめ、冷却水系水処理剤など、多様な製品を開発・製造しています。販売においては、水処理業界で世界トップクラスのナルコ社と当社との合併による片山ナルコがナルコの有するグローバル技術で補完し合って、ソリューション提案から販売、アフターフォローまでを日本市場で行っており、国内では現在、2位の販売シェアを誇っています。当社の売上比率は、コア事業である水処理事業が80%を占めています。また水質分析や作業環境分析などの環境分析事業

が10%、その他、住環境事業や水産事業、消臭事業などが残り10%となっています」。

社名に“研究所”とあるように、会社設立時から片山化学工業研究所では、お客様の水に関する様々な課題を技術営業がヒアリングし、自社の研究部門で課題解決につながる薬剤を研究開発、さらにラボや現場での試験評価を行った上で効果が検証できてから、工場で生産するスタイルを取っている。このお客様に寄り添って課題を解決する姿勢を60年以上継続してきたことから、確かな信頼を築き、現在では、日本を代表する鉄鋼メーカーや製紙メーカーをはじめ、石油化学関連製品メーカー、エネルギー会

会社概要

所在地	大阪市東淀川区東淡路1-6-7 TEL 06-6322-0176	
設立	1956年12月(創業1908年)	
従業員数	212名	本社
資本金	9,8000万円	
年商	78億円('24/3期)	事業内容
事業内容	環境分析 水産用医薬品、木材保存剤、ボイラ用水処理剤、冷却循環水系防食剤、工業用水処理剤 海水冷却プラント付着物障害防止剤 ビルの空調用水処理剤 上下水道および排水・污泥処理剤 製紙・パルプ工程のスライムコントロール剤 製紙・パルプ工程のピッチコントロール剤 製紙・パルプ工程用洗浄剤 流出油処理剤、油吸着材等の公害防止剤 工業製品防汚防カビ剤 イオン交換樹脂、水質試験器、薬注装置ほか	
URL	https://www.katayama-chem.co.jp	
関係会社	片山ナルコ株式会社 従業員数253名、年商185億円('23/12期)	

代表取締役社長

野村 安宏氏

多彩な水処理事業と派生事業で、
安全な暮らしと産業の発展を支え続ける

MIRACLE
奇跡を創造し続ける



社など、幅広い分野の企業との取引きにつながっている。

「水をテーマとして長年研究開発を続け、異分野へソリューションを提供してきた中で培われたノウハウは、新しい領域での事業につながっています。例えば、木材を腐朽やカビ、シロアリなどから守る製品を提供する住環境事業、国内のスズキ目やフグ目魚種の養殖場において魚に付く寄生虫を駆除する動物用医薬品の提供を行う水産事業、また工場から排出される臭気を改善する薬剤を提供する消臭事業といった、人々の身近な暮らしに関わる分野の事業に取り組んでいるところだ」。

これ以外にも、自社の分析センターにおいて各種産業分野で長年培ってきた特殊分析に関する技術ノウハウを駆使して、水質や地下水、飲料水、大気、土壌、アスベスト、環境ホルモン、農業など

の分析と改善提案を行う環境分析事業を展開するなど、今まさに社会に必要とされる環境課題の解決に貢献する取り組みにも力を入れている。

History

お客様の課題を解決する 技術を次々と開発し、 急成長を遂げる

1908年、片山松蔵氏が興した医薬品の重炭酸曹達などを精製・販売する片山製薬所から、片山化学工業研究所の歴史は始まる。創業後3年で松蔵氏が病で亡くなった後、妻の片山もと氏が20数年にわたって事業と会社を守り続けた。そして1931年、二人の息子である片山栄氏が事業を受け継ぎ、発展させる形で片山化学工業研究所を設立、ボイラーの配管内に発生するスケール（水垢）や腐食を抑制するため水に添

加する薬剤『清缶剤』を唯一の製品として事業を開始した。当初1年間は、ほとんど売れず、一回は売れたとしても継続して取り引きをしてくれる企業はいまなかったという。その中でも諦めず企業を訪問する、そんな地道な営業努力が結実し、1933年に川崎造船所への製品納入が決まる。このことをきっかけに造船各社をはじめ、他業界の企業との取引きが増えていったのだった。

しかし、1945年に大阪は大規模な空襲を受けて、市内にあった工場、自宅共に焼失、その年には終戦を迎える…。戦火で全てを失った栄氏だったが、戦後の日本の復興を見据えて1年がかりで工場を再興し、1946年には新たなスタートを切る。その後も地道な営業活動と顧客との信頼関係づくりに奔走し、新製品の研究開発にも取り組んだ。その後、日本全体の復興と製鉄や製紙産業の発展とも相まって『清缶剤』の需要は伸びていった。そして1956年、株式会社に組織改編し、さらに成長を加速させていったのだった。

「この時から、当社の今につながる事



片山化学工業研究所
公式キャラクター ミラちゃん

株式会社 片山化学工業研究所

C O L U M N



創業者・片山栄氏



片山栄氏が座右の銘としていた言葉“自他不二”

経営者であり、禅僧でもあった創業者が残した想い

片山化学工業研究所が60年以上にわたって受け継いでいるのが、創業者・片山栄氏が残した、常に足元を照らして自らを顧み、誠実で堅実であることを意味する“脚下照顧”自分と相手すなわちお客様と当社は他人にあらずを意味する“自他不二”という言葉だ。この2つの言葉は、もともと仏教の禅にある。

栄氏が幼い頃、腸炎を起こして生死の境を彷徨った。一命を取り留めたものの、栄氏は右目が

不自由となり、両親は将来を案じたという。そうして父親は、栄氏がずっと幸福に暮らせるよう、出家して俗世にまみれず生きられる道を提案し、父の急逝後、栄氏は僧籍に入ることになった。紆余曲折があり、20歳の時に俗人として、家業の製菓を仕事にすると決意した栄氏は、京都薬学専門学校に入学、卒業後は製菓会社などで働いた後に片山化学工業研究所を起業したのだった。晩年栄氏は、僧籍に復帰し、日々座禅を通して己を見直し続け、そして“脚下照顧”“自他不二”の教えを繰り返し、家族や社員に説いたという。

業の形がより鮮明になってきたと思います。株式会社化以降、日本経済は大量消費時代を迎え、製造工場の生産が増大していったこと、また世の中が石炭から石油へ移行するエネルギー革命が進んでいったことで水処理剤のニーズも増え、求められる品質や性能も変化してきました。そうした時代の動きを捉え、当社では新たな製品の研究開発に取り組み、重油対応型ボイラーの助燃剤『ミラクルサンオイル』や冷却水系水処理に使用される防腐剤『ミラクルHP』などを生み出したこと、さらに試験研究所を開設したことは、研究開発型企業の礎となる大きな出来事だったと思います。

その後も研究所の増設、分析機器や研究設備の拡充、工場の新設・増設な

どにより生産力向上を進めた片山化学工業研究所は、1960年代半ばには、全国各地で深刻化していた公害問題に対応する形で、冷却水用及び製紙用スライム（微生物）コントロール剤を生み出す。品質ならびに安全性の高さを評価されたこの製品は、やがて全製紙メーカーのスライムコントロール剤ではシェア40%を占めるまでになった。

「以降も当社は、時代のニーズに即した新製品を生み出すと同時に、より安全で環境に優しい製品の研究開発に打ち込んできました。また1996年には、淀川工場、三国工場、伊丹工場と倉庫を一つにまとめる形で、綾部工場を新設しました。続く2004年には、水処理業界で世界No.1のグローバル企業・ナルコ

社（2011年にエコラボ社に買収され、現在はエコラボグループに所属）の技術を取り入れて、新規化学物質の研究開発を加速させるべく、合併会社片山ナルコ株式会社を設立しました。そこからすでに20年が経ちますが、片山ナルコがあったからこそ、2008年のリーマンショックによる不景気や2020年のコロナ禍の厳しい経営環境も乗り越えることができました」。

Management

人の成長を軸に据え、企業としての成長を描く

2017年に代表取締役役に就任した野村安宏社長のもと、片山化学工業研究所では現在、「化学薬品の製造業から、価値の創造業へ」をスローガンに掲



綾部工場は、製造から品質管理、出荷までを一環して担っている。工場では生産性向上と安全性向上を重視し、常に改修や最新設備の導入などを行っている。



げている。新技術や製品の研究開発をはじめ、営業サービスをさらに進化させることを意識している。その一つが薬剤提供に加えて、デジタル技術を駆使した効果測定や状況をモニタリングするシステムを一括で提供するサービスだ。これは、これまで多様な分野の水処理で製造工程から携わってきた知見と研究開発で培われた独自の分析技術を有する片山化学工業研究所だからこそ提供できるサービスだ。今後、ITやDX（デジタルトランスフォーメーション）の導入がさらに進む業界において、効率化やコスト削減、トラブル回避といった新たな価値を生み出すことは間違いない。「世の中や当社が関わる産業分野も大きく変わる中で、変化を常に敏感に感じ取り、先を見通す目を持って対応し、進化していくことが大事だと私は考えます。社内に目を向ければ、働き方や考え方も時代とともに変化していきますから、経営者としても考えを常にアップデートしていくことも必要不可欠ですね。その意味で、当社では祖父の片山栄の時代から長く受け継がれる「脚下照顧”自他不二”」を基本とし、MIRACLEを通して社会に貢献する」（8頁TOPICS参照）という経営理念を核に、品質（経営）方針、安全基本方針、環境方針、そして人材育成方針に落とし込んだ会社としてのビジョンを作成して社員に共有していま

す」。

このビジョンでは、「人が成長してこそ、会社が成長する」というテーマを打ち出し、「安全文化の風土づくり」「人材育成と相互協力の推進」「従業員の生活の安定と向上」といったことも明文化されている。ここから派生した具体的な取り組みとしては、人材育成委員会を設置して若手リーダーが研究職や営業職、それぞれの人材のスキルアップを図り、次世代人材の育成に取り組んでいるところだ。また前社長の片山博彦氏が始めた社員会を継続し、四半期に一回、役員と各部署から選ばれた社員の代表が意見交換できる場をつくっている。また新たに社員が何でも会社に対する要望を投稿できるミラクルボックス（通称:Mボックス）を設け、随時、野村社長や経営層が内容をチェックして、職場環境の改善を行うなど、人にフォーカスした経営を重視している。

Future

新たなソリューションで、未来の環境課題を解決する

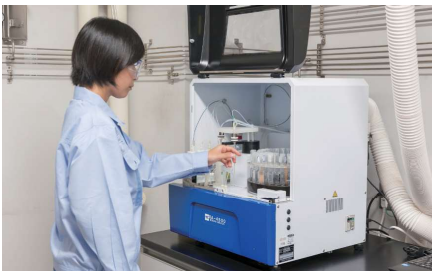
「世の中の全ての産業は、水をはじめとする木材、地下資源、海水、土壌など、限られた地球の資源を利用しています。その貴重な資源をいかに有効活用し、産業の生産性を高めるための製品やサービスを提供できるか?またお客様

や世の中の環境負荷軽減やSDGs推進についての取り組みに貢献できるか?が私たち片山化学工業研究所が果たすべき役割だと思います」。

と野村社長が語るように、世界中の企業が環境経営に取り組む中、今後さらに片山化学工業研究所の技術や製品が必要とされることは間違いない。だが野村社長は、さらに違った分野への参入も見据えている。

「最新技術で高度化された分析技術により、化学物質がもたらす環境や生物への影響が詳細に解明されつつあります。その結果、工業用だけでなく農林水産業や医薬品産業なども含めて、今まで以上に安全性が重視される中で、さらに進歩した無公害化、無毒化、環境負荷低減を実現する処理技術の研究開発が求められている現状があります。これらの新たな環境課題に対応できるソリューションへのニーズは、当社にとってはチャンスであり、まさに新たな技術や製品を生み出す種となるものです。その意味では、今後も引き続き研究開発に重きを置き、産業の発展や豊かな人の暮らしの実現、そして環境課題の解決に貢献していきたいと思います」。

片山化学工業研究所が今後新たに生み出すソリューションは、産業の持続的発展と暮らしの安心が両立した未来を創造してくれるだろう。



大阪分析センターをはじめ、茨城県、和歌山県にも分析拠点を開設し、最新の分析機器を使って排水や産業廃棄物、排ガスなどの分析を行っている。